２０１９／１０／１３　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　副牧師

主　　題：互いに正し合うこと
聖書箇所：ガラテヤ人への手紙　６章１－２節

　きょう私たちが見ていくのはガラテヤ６：１－２ですが、この箇所が書かれた文脈を理解していただくために５：１６からお読みします。

ガラテヤ５：１６－６：２

:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。
:18 しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。
:19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、
:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、
:21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。
:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、
:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。
:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。
:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。
:26 互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることのないようにしましょう。
6:1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。
:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。

☆テーマ　＝　互いに愛し合うことにおいて成長する
☆テーマ　＝　互いに赦し合うことにおいて成長する

　さて、前々回と前回、私たちは互いに愛し合うこと、また互いに赦し合うことについてともに学びました。まず私たちは、相手がどうであれ、状況がどうであれ、みずから率先して犠牲を伴った愛でもって互いを愛することが大切なのだということを見ました。

　そしてそれだけではなく、私たちは互いに赦し合う者でなければならないということも見ました。たとえ相手が自分のことを傷つけ、自分に対して罪を犯したとしても、その傷つける行為がすごく大きなものであったとしても、いつまでもその相手に対して苦い思い、怒りや失望、悲しみや復讐心を持ってはいけないということを見たのです。聖書の教える赦しは無条件で、相手に対して負の感情を抱き続けないということ私たちは見たのです。どんなことをされたとしても、心からの赦しを自分から提供しなければいけない。その大切さとその責任について私たちは見ました。

　確かに私たちにとって、互いに愛し合うことも互いに赦し合うことも実践することが困難なことのように思えました。しかし、私たちがまだ罪人であり、主の敵であり、神に逆らって歩む愚か者であった時、永遠の罰を受けて当然の状態であった時に、私たちの主イエス・キリストは喜んで私たちを愛し、無条件ですべての罪過を赦してくださったのです。主の十字架に私たちが見ることができるもの、それは主ご自身がみずから率先して、犠牲を伴った愛でもって私たちを愛してくださったことです。私たちが繰り返し繰り返し主を怒らせ、主を失望させるようなことをしている状況にあっても、主は私たちのことを無条件で愛してくださったのです。ですから確かに私たちの目には互いに愛し合うことも互いに赦し合うことも難しいように思えますが、私たちがこのことを実践するに当たって、私たちはただひたすらイエス・キリストのすばらしい愛とすばらしい赦しを覚え続けることが大切なのだということを学んだのです。この教会の中にあって、ここにいる私たちの兄弟姉妹がともにキリストのからだとして、神の家族として生きていくのであれば、互いに愛し合うことも互いに赦し合うことも必要不可欠なものだということを私たちは見ました。

☆テーマ　＝　互いに正し合うことにおいて成長する

　さて、今朝皆さんと一緒に考えたいことは、互いに正し合うということです。兄弟姉妹が罪を犯して正しい道から逸れていることに気づいたなら、その人のところに行って罪を指摘し、間違った道から正しい道へ戻るようにと手助けをすることが必要なのだということを私たちはこれから見ていきます。互いに正し合うということを聞いて、恐らく皆さんはこんな考えが頭に浮かばなかったでしょうか？互いに愛し合うことも互いに赦し合うこともそれは私たちにとって非常に難しいけれども、互いに正し合うこ

とほど難しいものはない、それは最も困難なことだと。そしてある人は、お互いの罪を指摘し合うこと、責め合うことは相手の人を傷つけることにつながるからそんなことはしないでおこう、そんなことは実践しなくていいだろうと考えるかもしれません。

そもそもなぜ私たちは互いに正し合う、互いの罪を戒め合うと聞いたら、すぐに難しいとか、自分にはできないことだと感じてしまうのでしょうか？もちろん幾つかの理由があると思います。例えばある人は、確かにあの人に罪があることは認めるけれども、自分にもその罪があるから相手の人に偉そうに言うことはできない。もしくはある人の罪を責めたことによって、その人が自分のことも責めてくるような、そんな状況に陥りたくないと思うかもしれません。またある人は、いやいやクリスチャンというものは互いに愛し合うべきで、人をさばくものではないと考えるかもしれません。ある人は、人の罪を指摘することに対して居心地が悪いとか、私は責めることは得意ではありませんと思うかもしれません。ある人は、結局のところ私と神様の関係がよければ問題ないのであって、互いのことは置いておいたらいいでしょうと思うかもしれません。自分が神の前に正しい生活をしてさえいればほかの人のことは関係ないでしょうと。また、もっと深く考えると、私たちは兄弟姉妹の罪を指摘することによって、その人を傷つけてしまうのではないか、その人が自分から離れていってしまったらどうしようと思うかもしれません。教会にあって友人を失いたくない、罪を指摘することによってこれまで築いてきた関係が壊れてしまうのではないかと思うかもしれません。また私たちがよく言うのは、互いに互いの触れられたくないところを責めるのは私たちの文化にはありません、私たち日本人の文化はそんなことはしませんと考えるかもしれません。そしてそもそも聖書的に正しく正し合うということをもしかしたら知らないかもしれません。さまざまな理由が皆さんの頭の中にも浮かんだと思います。

しかし、もし先ほど挙げた理由で皆さんが互いに正し合うことができないと考えてしまっているのであれば、メッセージを始めるに当たって二つのことを覚えてほしいのです。まず、私たちは互いを愛し合う、互いを赦し合うということと同じように、互いを正し合わなければいけないという命令を神から受けているということです。互いに正し合う責任がひとりひとりに与えられているのです。そしてもう一つは、私たちがクリスチャンの家族として本当に心から愛し合って一致を保ち、神に喜ばれる礼拝を捧げようと願って歩んでいくのであれば、この互いに正し合うということは大切であり、必要不可欠なものだということです。どうしてかと言うと、答えは簡単です。救われた後も皆私たちが罪人だからです。私たちは救われた後も変わらず罪を犯してしまいます。確かに救われた私たちは神が喜ばれることをしたいと願い、よりキリストに似た者になりたいと祈り、みことばを学び、いろいろなところで仕えたり、そんなことを私たちは喜んでしようとします。私たちは神を、そして人を心から愛していきたいという思いを得て努め励もうとするようになったのです。でもここにいる全員に当てはまることですが、私たちは多くの場合失敗を経験します。私たちは神に対してだけではなく、兄弟姉妹に対して罪を犯してしまいます。そして、その犯した罪の結果が非常に大きなことを招いた経験をした方もおられると思います。罪というものは放っておいていい問題ではないのです。そして残念なニュースは、私たちがこの地上を生きて死ぬまでの間、キリストが私たちを迎えに来てくださるまでの間、私たちはいつまでたっても罪人だということです。そしてこの罪という問題はどうあがいても私たちにまとわりつく問題なのです。だから私たちがたとえどんな理由を持ってきたとしても、この罪の問題に正しく対応しないのであれば、私たちがキリストのからだとしてみんなで一致してやっていくことができなくなってしまうのです。私たちがキリストにあってキリストのからだとして兄弟姉妹を本当に愛し合って、本当に仕え合って生きていこうとするならば、私たちが互いを赦し合うのと同じほど互いに正し合うことが必要なのです。

では実際、聖書が私たちに教える互いを正し合うというのは一体どういうものでしょう。私たちは一体どうすれば互いを正し合うということにおいて成長することができるのでしょう。そのことをきょう私たちはこのテキストから学んでいきたいと思います。そしてどうかこのみことばによく耳を止めてください。私たちが神をより愛して、私たちが互いにもっともっと仕え合って神に喜ばれる者として成長していこうとするならば、この互いを正し合うということは必要不可欠だと言えます。このみことばが私たちがこのことにおいて成長する助けとなることを心から祈っています。

Ａ．互いに正し合うことの二つの要素

さて、もう一度１節を見てください。まず内容を見ていく前に少し皆さんに覚えてほしいことがあります。１節は「**兄弟たちよ**」ということばで始まっています。パウロはここで兄弟たちに向かってこのことばを語りかけたということです。先ほど読んだガラテヤ書の流れを思い返してください。パウロは５章の中でガラテヤのクリスチャンたちに対して御霊によって歩むことを求めます。「**御霊によって歩みなさい**」という命令を与えたのです。かつて肉の欲望を満たして、自分の肉に従うこと、自分がやりたいことだけを喜びとして求めていたガラテヤの人々に対して、キリストによって救われて新しいいのちを与えられ、新しい願いを与えられたクリスチャンは、御霊によって歩み続けなければいけないと、そのことを

対比して人々に教えました。ここで２２－２３節に書かれていたように、救われた者は神から「**御霊の実**」というものが与えられたのです。「**御霊の実**」というものは「**愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、 柔和、自制**」でした。かつての古い生き方を捨てて、新しい者として生きていくために、救われた者が与えられた御霊に満たされて生きていきなさい、この「**御霊の実**」を自分の生活にあって明らかにしていきなさいと、パウロはこの人たちに命じたのです。パウロは５章でそう命じた後に、では「**御霊**」によって生きていくということが具体的にどういうことなのかをあなたがたに教えましょうということで、６：１が書き始められているのです。ここで皆さんに覚えていただきたいことは、パウロがイエス・キリストをその救い主として信じ、そして主人として従っているクリスチャンに対して語ったということです。ですからここに書かれていることは私たち全員に当てはまることで、ここに書かれている原理は決して変わることがないということです。パウロは私たちに対しても同じように語っています。

ではどういうことを語っているかというと、互いに正し合うということは二つの要素から成り立っているということです。私たちはこの１－２節の中からそれを見ることができます。。

１．正し合うとは兄弟の罪を御霊の人が柔和な心で正しい状態へと戻すこと　１節

まず互いに正し合うことの二つの要素の一つ目は、正し合うとは兄弟の罪を御霊の人が柔和な心で正しい状態へと戻すことです。この要素に関して、５つの大切なことばを１節の中に見ることができます。

１）<u>もしだれかがあやまちに陥ったなら　１節ａ</u>

１節「**兄弟たちよ**」に続いて「**もしだれかがあやまちに陥ったなら、**」ということばがあります。ここで「**あやまちに陥**」るということばが使われていますが、残念ながら日本語の聖書ではここの部分を正しく、詳しく表わされていません。注意していただきたいのは、「**あやまち**」ということばの前には「さまざまな」とか「どんな」ということばが本来含まれているということです。どういうことかと言うと、ここで「**もしだれかがあやまちに陥ったなら**」というのは、もしだれかがさまざまな、またどんなあやまちに陥ってもということです。またここで「**あやまち**」と訳されていることばは聖書の中にあっていろいろな箇所で「罪」や「罪過」と訳されていることばが用いられています。どういうことかというと、誰かがいろいろな罪に陥ったならばということになります。

そして最後に「**陥**」るということばは「ある時突然予期せぬ時にわなに捕まってしまう」というイメージを表わすことばが使われています。突然、わなに掛かってしまう。ですからここのことばをまとめると、パウロはもし兄弟たちのだれかが罪を犯したのであれば、それがたとえどんなものであってもその兄弟を正す必要があるのだということを教えています。

２）<u>御霊の人であるあなたがた　１節ｂ</u>

二つ目は、「**御霊の人であるあなたがた**」と続いています。この「**御霊の人**」が一体だれを表わすのかというと、先ほど見た５章の中に記されている御霊に満たされて生きている人のことです。

（１）神への思いで心が満たされている人

具体的に言うと、心がいつも神への思いで支配されている人です。神に対する思いで心が満たされているのです。いつでも神に対する思いがあるそんな人のことを「**御霊の人**」と言うのです。

（２）神を喜ばせることを優先する人

また、それだけでなく御霊に導かれていく中にあって、いつでも神様の喜ばれることをしていきたい、いつでも神様が求めておられること、神様を喜ばせることを優先しようとする人が「**御霊の人**」だと言っています。

（３）その歩みに御霊の実があふれている人

そして三つ目に「**御霊の人**」というのは、その人が主を喜ばせることに心を満たしているがゆえに、いつでも主の喜ばれることをしようとするがゆえに、先ほど見た「**御霊の実**」がその生き方の歩みに明らかになってくるのです。ですから心がいつでも神様に対する思いで満ちあふれている人、いつでも神様のみこころを求め、神が求めていることを成し遂げたい、神様に喜ばれる者になっていきたい、イエス・キリストに似た者に日々変わっていきたいと願い続けていくのであれば、必然的にその人の生き方の中には「**御霊の実**」があふれるようになってくると。

そしてこんな「**御霊の人**」には兄弟姉妹が罪を犯した時にそれを正すという責任があるのだとまずパウロは言うのです。ここで間違ってほしくないことは、「**御霊の人**」というのは決して罪を犯さないわけではありません。私たちも知っているとおり、この世の中にあって罪を犯さない、そんな完璧な人はいません。Ｉヨハネ１：１０に「**もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。**」と書かれています。ですから私たちがどれほど喜ばれることをしようと思っていても、私たちは失敗をしてしまう、私たちは罪を犯してしまうのです。でも「**御霊の人**」というのは、いつでもみことばに聞き従って、確かに罪を犯すけれども、悔い改めて神に赦しを求め、神に喜ばれることをしていきたい、信仰において成熟していきたいと望む者なのです。

少し自分に問いかけてみてください。私はこのような「**御霊の人**」でしょうか。私たちはいつでもみこころを求めて、みことばに聞き従い、そしていつでも「**御霊の実**」を自分たちの歩みの中に実らせている人でしょうか？キリストを信じた者、キリストによって救われた者は聖書が約束されているとおり、救われた者には必ず聖霊が神から与えられるのです。私たちは確かに聖霊が与えられるのですが、その与えられた聖霊によってそれぞれの歩み方や成熟度は人それぞれ違います。ゆっくりゆっくり成長していく人もあれば、ぱっと成長する人もいます。そのように成熟度に違いはあれども、私たち「**御霊の人**」の願いは日々神様に喜ばれる者になっていきたい、キリストに似た者に変わっていきたいということです。そして実際にそのように歩むのです。私たちはそのような人でしょうか？そのような救われている者、御霊が与えられている者には兄弟姉妹が罪を犯した時にその罪を正す責任があるのです。

３）**柔和な心で　１節Ｃ**

三つ目は「**柔和な心で**」ということばが続いています。今まで見てきたように、私たちはどんな罪であったとしても兄弟が罪を犯したのであれば、その罪を正すという責任があります。しかし同時に私たちが覚えなければいけないのは、この互いに正し合うというのはどんな態度でしてもいいということではありません。私たちは「**柔和な心で**」それをすることが求められています。この「**柔和**」ということばは、私たちが先ほど見た「**御霊の実**」のリストの一つに挙げられています。これは謙遜であることです。うぬぼれたりしないということです。謙ること、親切に、丁寧にいつでも思いやり深いということです。私たちは「**柔和な心で**」互いを正し合わなければいけないのです。私たちの模範であるイエス・キリストはこのような「**柔和な心**」を示されたことを私たちは見ることができます。

マタイ２１：５の中に、イエスのことをこう形容されています。「**見よ。あなたの王があなたのところに来られる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。**」と。本来王であるイエス・キリストはろばなどに乗るような必要もない。それなのにイエス・キリストはろばに乗ってエルサレムに入城されたのです。イエスはご自分の立場を顧みられなかったのです。イエスは高ぶったりしなかった。いつでも謙って、いつでも人のことを思って、思いやり深く人々に対して愛を示された。またイエスは山上の説教の中でもマタイ５：５で「**柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。**」と教えます。私たちが兄弟の罪を正す時、必要なのは主が示されたのと同じ柔和をもって互いに正し合うことです。でも私たちが自分の生活を振り返るなら、私たちがよくやってしまうのは、それをしている人のところに行って、ただその目に入った罪だけを責めることです。私たちはよくただその人の間違っているところだけをさばいてしまいます。私たちは一方で人をさばいてはいけません、兄弟の罪を正すことは難しいですと、そのような思いを持っていながら、人の過ちや人の罪はよく見えます。あの人はあんなことをしている、あれは間違っていると。私たちは自分自身のことを棚に上げて、ただ兄弟の行為を罰するのです。兄弟のことをただ責めるだけ、そのようなことを私たちはよくしてしまいます。

私たちが互いに正し合う時に、もしそのような態度でするのであれば、それこそ私たちは人と人との間を引き裂いてしまいます。私たちが互いの罪を正し合う時に、私たちはいつも「**柔和な心で**」それをしなければいけないということを覚えておかなければいけないのです。マタイ７：３－５の中に「**また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。**」とあります。私たちがよくやってしまうことがここに記されています。自分の中に大きな罪があるにもかかわらず自分のことを棚に上げて、他の人を責めるということを私たちはよくしてしまいます。ここで私たちが見ることができるのは、私たちがだれかを責める前にまず自分自身の心を吟味しなければいけないということです。確かに罪を犯したその兄弟に対して罪を罪と認めさせることは大切です。むしろそれはしないといけません。しかし、もし自分の心を吟味しないで、自分の罪を悔い改めずにほかの人のことを責めるのであれば、それは大きな間違いです。もし私たちが自分は正しい、あの人は間違っていると、そんな高慢な態度で互いに正し合うことをしようとするのであれば、それも神に喜ばれない。だから私たちが互いに正し合う時に、私たちはいつでも「**柔和な心**」をもって互いを正し合うことが必要なのだということを見ることができます。

４）**正してあげなさい　１節ｄ**

四つ目はその続きに「**正してあげなさい。**」という命令が記されています。このことばは間違った位置にあるものを正しい位置に戻すという意味を持ったことばが使われています。このイメージが私たちにわかりやすく表わされているのがマタイ４：２１になるのですが、「**そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。**」と書かれています。ここで私たちは「**ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、……舟の中で網を繕っている**」様子を見ることができます。ここの「**繕**」うということばが「**正**

してあげなさい」ということばと同じことばです。どうして漁師たちは網を繕っていたのでしょう？当たり前ですが、網に穴が開いていたらどれだけ漁に行っても魚を捕ることはできません。漁師は魚を捕るために破れた状態をもとの状態に戻す必要があったのです。そして同じように私たち自身も互いに正し合う時に、このことをしなければいけないのだと言うのです。

もし兄弟が罪を犯して間違った道に逸れ続けているのであれば、その兄弟は神の働きのために役に立たない者になってしまっている、益とならないということを私たちは覚えなければいけないのです。もっと言えば罪を犯し続けている人が教会の中にいるのであれば、教会全体が神のきよさを求めて神に喜ばれる聖い教会を目指していこうとする時に、絶対にその人とぶつかることになります。そのような罪があるのであれば、教会の中に悪い影響を及ぼすことになります。その罪を解決する必要があるのです。

このことがすごく大切なことは私たちは別のところにも見ることができます。マタイ１８：１５－１７にも同じように罪を犯した兄弟を正すようにという命令が記されています。「**また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。**」とあります。皆さんに質問ですが、罪を犯した兄弟を責める命令が与えられているのは一体だれに対してだったでしょう？一体だれが罪を犯した兄弟を責めるという責任があったでしょう。この箇所が私たちに教えていることは、その責任はあなたにあるのだということです。ほかのだれでもない、もし私たちがだれかの罪を見つけたのなら、あなたがその人の罪を正してあげなさい。もしその人が悔い改めなければ二、三人を連れていって、それでも聞こうとしないのなら教会に告げなさいと。でもまず初めのステップは私たちが自分で行ってその人を正してあげなさいと。そして皆さんもよく知っているように、この互いに正し合う、罪を指摘しに行くことは決してその人を教会から排除するためにするのではないのです。間違いを指摘することでその人に恥を与えようとするわけでもありません。私たちが本当に兄弟姉妹のことを愛するのであれば、間違ったところに落ちてしまった兄弟を助け出して、罪に向き合わせて悔い改めさせて正しい状態に戻し、同じように神に喜ばれる者としてともに成長し、継続して歩んでいきたいと願います。

私たちは多くの場合、自分自身の罪に気づかないことがあります。私たちはほかの人にある罪についてはよく見えますが、自分自身の心のうちにある罪を見ることができないことが多いのです。だからこそその兄弟が罪を犯したのであれば、周りから見ていて、行ってその兄弟の罪を正しく直してあげる。よりキリストに似た者に変わっていってほしいと、この人のことを心から愛する愛が動機であるがゆえに、私は行ってその人の罪を責める。そしてそのときに私たちは「**柔和な心**」でもって罪を正し合う必要があるのだと。

５）<u>自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい　１節ｅ</u>

五つ目に「**また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい**」とパウロは注意を与えます。どうして互いを正し合う時に誘惑に陥らないように気をつけなければいけないのでしょう？それは兄弟のところに行って正しい状態に戻そうとするならば、あなたはその兄弟の持っている罪と真っ正面から最も間近で向き合わなければいけないからです。怒りを問題としている人のところに行って、そのことを正そうとすれば、その人はあなたに対して物すごい怒りを爆発させるかもしれません。嘘を問題としている人のところに行ってそれは違いますよと正そうとするならば、その人はあなたに対して嘘をつくかもしれません。どんな罪でもそうです。どんな問題でもそうです。相手の罪と向き合うと同時に私たちは自分の罪深さにも気づくのです。だからもし私たちが注意していなければ、怒ってこられたことに対して怒りで反応してしまったり、嘘をつかれたことに対してそのことを根に持ったり、そのような罪の誘惑に私たち自身も陥ってしまう危険性があるのです。だから私たちはそのような誘惑にかからないように気をつけなければいけないとパウロは教えたのです。

２．正し合うとは、正しい状態に戻った互いの歩みを続けて助け合うということ　２節

さて、五つのことばを通して、正し合うということの一つ目の要素を見ました。これはどんな罪であったとしても、兄弟姉妹のだれかが罪を犯したのであれば、御霊によって生きる御霊の人、あなたが自分を謙らせて、柔和をもって、その罪の誘惑に自分自身が掛からないように気をつけながらもとの状態へと正しく導いてあげるということでした。続いて二つ目は、２節の中に「**互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。**」と記されています。二つ目の要素は、正し合うというのは正しい状態に戻った互いの歩みを続けて助け合うということです。言い換えれば、罪を指摘して悔い改めた兄弟が正しく歩み続けていく手助けを私たちはしなければいけないということです。

ここで２節の初めに「**互いの重荷を負い合い**」ということばが使われていますが、「**重荷**」ということばはひとりで背負うことのできないような重さを持った荷物のことを表わしています。私たちも知っているように、罪というものは私たちひとりひとりにとって深刻で大きな問題です。私たちはいつでも罪との葛藤を覚えながら生きています。でも特に今罪を認めて、罪から悔い改めをして赦されて、新しい一歩をまた踏み出そうという者にとって、罪の誘惑というものはひとりで抱え切ることのできない重たい危険な問題なのだということをここで見ることができます。マッカーサー先生はこのように言われます。「罪から解放されるというのは、いつも罪の誘惑から解放されるということではない」と。私たちはいつも罪の誘惑に遭います。その中にあって、特に罪を赦された兄弟にかかる罪の重さは大きいと。だから私たちが兄弟の中に罪を見出して、その兄弟のことを正してあげて、その兄弟が悔い改めたなら、私たちは喜ぶのです。でもそこで終わりではない。もし私たちがその兄弟のことを本当に愛するのであれば、本当にその兄弟の成長を心からケアするのであれば、悔い改めた後もその兄弟が負っている重荷をともに負ってあげなければいけないと言うのです。その兄弟が同じ罪の誘惑を受けて同じ罪に陥ってしまわないために、私たちはその兄弟ともしかしたら一緒に時間を過ごさないといけないかもしれません。私たちは喜んでその兄弟たちと祈り合うことも必要でしょう。その人に対してみことばをもって導いてあげたり、そのようなことを私たちはしなければいけないのです。重荷を担い合う責任があるのだと教えます。

残念ながら、私たちは互いの重荷を負い合うことに関してよく躊躇するのです。ある人はそれは時間が掛かるからやりたくないとか、それをしてしまうと自分の自由がなくなってしまうとか、この人とはできないとか、この人には自分のエネルギーが物すごくかかってしまうから無理だとか、いろいろな理由でもって私たちは互いの重荷を担い合うことをしないことが多いのです。そしてその結果、その罪を赦され、悔い改めた兄弟が同じ誘惑にかかって罪に陥ってしまうのです。もちろん私たちの助けも私たちが誘惑に勝つための力もそのすべては神から来ることは言うまでもありません。全能で主権なる私たちの神に、私たちは自分の持っている重荷を委ねることもできるのです。詩篇５５：２２の中に「**あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。**」と記されています。私たちの神は私たちの重荷を担ってくださるお方です。ですから当然私たちはこの神に対して祈り、助けを求めることが大切です。しかし、同時に私たちは同じ神を愛する者として兄弟姉妹と助け合って、兄弟姉妹を励まし合いながら重荷を背負ってともに歩んでいく必要があるのです。

互いのことを罪に陥らないように注意し合うのです。そしてよりキリストに喜ばれる者になっていくための責任をお互いに負い合うのです。そのような兄弟姉妹が皆さんの生活の中にいるでしょうか？あなたがもし間違ったことをしたならば、あなたのところに来てそれは間違っていますよと、それは罪ですよと聖書から教えてくれる兄弟はいるでしょうか？そしてまた罪を指摘するだけではなくて、忍耐をもって、柔和の心をもって神に喜ばれる者になろうとするあなたの助けをしてくれる人がいるでしょうか？そして、私たちひとりひとりはそのような人でしょうか？私たちがこの教会の中にあって、神の家族として互いに愛し合いながら、互いに神の喜ばれるものを目指していこうとするならば、私たちは互いの重荷を担い合うことが必要です。私たちはそのような本当の信仰の友というものを持たなければいけないのです。

そしてパウロは続けて、もし私たちがこれらのことを実践するならば「**キリストの律法を全う**」することになると言いました。「**キリストの律法**」というのはイエスがヨハネ１３：３４で「**あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」と言っています。パウロも同じようにガラテヤ５：１４で「**律法の全体は、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです。**」と言っています。キリストの律法を一言でまとめるのであれば、それは愛の律法と言うことができます。キリストが私たちを愛してくださったように、私たちが互いに愛し合うのであればこの律法を全うすることになるのだと言うのです。私たちが覚えなければいけないことは、私たちが罪を和解しようとする時に、罪を「**柔和な心で**」指摘するだけではなくて、互いに重荷を負って愛し合いながら、助け合いながら、励まし合いながら歩んでいくことが大切だということです。

◎ 二つの質問

さて、最後に３回のメッセージを終えるに当たって、二つのみことばを皆さんひとりひとり自分の心に素直に問いかけていただきたいと思います。それは私自身も日々考えさせられている二つのみことばです。

まずヨハネ１４：１５に「**もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。**」と記されています。心に問いかけてみてください。あなたは私たちの主イエス・キリストを何より

も愛しているでしょうか？あなたの生活の中にあってイエス・キリストがいつでも中心でしょうか？そしてもしイエスと答えられるのであれば、生活の中であなたは互いに愛し合うこと、互いに赦し合うこと、そして互いに正し合うことを実践しているでしょうか？確かに周りを見れば、私たちが愛することができない、愛せないような相手もいます。私たちが赦すことができないような仕打ちを受けることもあります。また正し合うことは先ほども見たように居心地が悪かったり、その人を傷つけてしまうのではないかと考えてしまいます。その人が自分から離れていってしまうのではないかと私たちは考えてしまうのです。確かに私たちの文化はそんな触れられたくないことを責めることをよしとしていないかもしれません。でも私たちが覚えなければいけないのは、２０００年前私のためにイエス・キリストが十字架に架かり、死から復活され、この方を信じる者に新しいいのちを与えてくださったということです。神が私たちを愛してくださり、古い人は死に新しくされた者として私たちは神様を喜ばせて生きたいという思いを私たちの心に与えてくださったのです。人に嫌われる、人を傷つけてしまう、人が私から離れていってしまう、もしそのように思われるならば、そのときに自分の心に問いかけてみてください。私は今、人を気にしているのか、それとも神を愛しているのかと。もし私たちが文化的にそれは難しいと思われるのであれば、ぜひ自分の心に問いかけてください。私は今神を一番にしようとしているのか、文化を一番にしようとしているのかと。私たちは古い者から新しい者に変えられた。その変えてくださったイエス様の愛というものは十字架の上だけではありません。私たちが今日常を歩む時にあって、イエス・キリストの愛がいつでも私たちのうちに注がれているのです。こんなすばらしい愛を神が私に示してくださっているのであれば、私たちはいつでもこの方のみこころに、この方の教えに従っていきたいという思いを持ち続けなければいけないのです。私を愛するなら私の教えに従うはずだと。

そして二つ目にヨハネ１３：３４に「**あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」と書かれています。ぜひ今自分に問いかけてみてください。今、あなたが兄弟姉妹を愛している愛し方であなたは神から愛されたいでしょうか？今、あなたが兄弟姉妹を赦しているその赦し方であなたは神から赦されたいでしょうか？もし互いの間に罪があるのであれば、まず自分の心を吟味することです。私たちは自分の心を吟味した中にあって罪がないのであれば、その人のところに行って柔和の心をもってその人を正す責任があるのです。私たちはそれを通してキリストのすばらしい愛の証を立てることができるのだと。

皆さん、教会というのはそんなところです。私たちはキリストにあって、どんな人でも一つにされたのです。私たちはキリストのからだとして、キリストの家族としてきょう今を生きていくことができるのです。私たちが願うことは、皆イエス・キリストに似た者に変わっていきたいと、イエス・キリストを喜ばせる者に変わっていきたいということです。もし私たちがそう願うのであれば、私たちは互いに正し合い、互いに赦し合い、そして互いに愛し合うことが必要なのです。そしてこの教会はそんなことができる場所なのです。この世の中にあってそんなことができる場所はありません。私たちの根底にキリストの愛があるから私たちはそんなことができるのです。そんなすばらしい場所が教会です。私たちは互いのことを愛し、互いのことを励まし、互いの重荷を負ってキリストの喜ばれる者として歩んでいくことができるのです。そんなすばらしいところを私たちも目指して行かなければいけないのです。ですからどうかともに主の助けをいただきながら、このような教会を目指して歩んでいきましょう。